様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２７日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：19520006
研究課題名（和文）　エピクロス派・ストア派が勧める生の内実の研究

研究課題名（英文）　A Study in the Lives Recommended by the Epicureans and the Stoics

研究代表者
荻原　理（OGIHARA　SATOSHI）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：00344630

研究成果の概要（和文）：ヘレニズム時代のエピクロス派とストア派が勧める生の内実を、プラトン、アリストテレスや現代の哲学者との対比を通じて明らかにし、これらの生を現代人に対し、注目すべき生き方の例として提示した。両派に共通する、生の理性的設計の思想は、衝撃的事態に見舞われた場合の態勢の立て直しに有効であろう。死にさいして魂は消滅するというエピクロス派の説は、現代の科学的世界像と調和し、死生観としても独自の魅力をもつだろう。自己は宇宙の一部だとするストア派の思想は、“報復しない倫理”に道を開くだろう。

研究成果の概要（英文）：This study has elucidated the nature of the lives recommended by the Epicureans and the Stoics and presented them as respectable options for ways of living. Attention has been paid to the idea of the rational planning of life shared by both schools, to the Epicurean teaching that death is nothing to us, and to the Stoic view of us as part of the universe.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：哲学、倫理学

１．研究開始当初の背景

1987年の A. Long & D. Sedley, *The Hellenistic philosophers* (2 vols, Cambridge U.P.)の出版を皮切りに、ヘレニズム哲学の研究は1990年代前半以降研究開始時に至るまで著しい興隆を見せていた。本研究との関連で特記すべき著書として、J. Annas, *The Morality of Happiness*, Oxford U.P., 1993; M. Nussbaum, *The Therapy of Desire*, Princeton U.P., 1994; Ch. Gill, *The Structured Self in Hellenistic and Roman Philosophy*, Oxford U.P., 2006 があった。本研究は

それら、エピクロス派、ストア派の倫理学の基礎的研究を出発点として、＜二学派の勧める生き方の内実＞という特定のテーマを掘り下げようとするものであった。なお、研究代表者にインスピレイションを与えた先行研究として、P. Hadot のストア派研究、D. Sedley のエピクロス派研究があった。

我が国では、ストア派については西洋古典叢書（京都大学学術出版会）でようやく基本資料の邦訳が刊行されている段階であった。また日本でのストア派研究は論理学、記号論、認識論、心の哲学に関心が集中しがちであり、ストア倫理学の立ち入った研究はまだなかったと言わざるを得ない。我が国のエピクロス派哲学の研究は、ストア派の研究に比してなお立ち遅れていた。日本の古代哲学研究者による、二学派の勧める生についての啓蒙書もまだ発表されていなかった。本研究はこうした状況を改善する一助たらんことを目差した。

研究代表者はソクラテス、プラトン、アリストテレスによる「いかに生きるべきか」の思索の研究をライフ・ワークとしている。その一環として、科研基盤研究（B)「Well-being（福祉・いい暮らし・幸福）概念の再検討とその実践的適用」で研究分担者として、古代哲学、特に三大哲学者における「よく生きる・幸福」の概念を研究し、また科研若手研究（B)「古代ギリシアにおける理性・合理性の概念―近現代の概念との対比に留意して―」で研究代表者として、古代ギリシア哲学における生の善さと理性・合理性との連関を研究してきた。そこで以下の二つのことが明らかとなった。第一に、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの「善き生」の哲学の意義を明確にするには、後のヘレニズム期の新潮流を視野に入れ、これと対比する作業が不可欠であること。第二に、エピクロス派、ストア派の勧める生について、通俗的な理解の仕方よりも適切な仕方があり得、その理解により、それらの生き方はより興味深い相貌を現わし得ること。本研究の構想はこうした経緯を背景として生まれた。

２．研究の目的

本研究は、（A）ヘレニズム時代（前4世紀後半～前1世紀後半）の哲学の二大学派、エピクロス派・ストア派のそれぞれが勧める生き方の内実を解明し、かつ（B）現代人に対してこれら二つの生を、注目すべき生き方の例として提示することを目的とした。（ヘレニズム哲学のもう一つの重要な学派、懐疑派が勧める生も視野に入れるが、本研究の焦点はあくまでエピクロス派・ストア派にあった。）

（A）エピクロス派・ストア派は、「いかに生きるべきか」への強烈な関心に貫かれている点で、ギリシア古典期のソクラテス、プラトン、アリストテレス以来の伝統を引き継ぎ、発展させている。だがそれらヘレニズム時代の二学派は、これら古典期の三巨人に較べ独創性に欠けるとか、精神的退廃の徴候を示しているとみなされることが多かった。哲学史的研究が進んできた今日でさえ、また我が国では、古代哲学の研究者の間でさえ、そうした見方はいぜんとして根強かった。だがそこには偏見が混じっているように研究代表者には思われた。ソクラテス、プラトン、アリストテレスとの「偉大さ」の比較は措くとして、エピクロス派、ストア派の勧める生き方は、それ自体として見たとき、尊敬すべき倫理性、高邁な精神性、首尾一貫性を示していると考えられたのである。本研究はそのことを示そうとした。

それだけではない。（B）エピクロス派、ストア派の哲学は多くの現代人にとって、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの哲学よりもむしろ受け入れやすい要素を含んでいる。そこで、ヘレニズム時代の二大学派の勧める生は、適切に、かつわかりやすく解説されれば、多くの現代人に新鮮さをもって訴え、生き方の貴重なヒントを与えてくれるものと期待されたのである。本研究は一般向けのそうした解説を提供しようとした。

３．研究の方法

研究分担者はおかず、研究代表者が当該テーマの専門家らと意見交換等を行ない研究を推進した。

2007 年度は主にエピクロス派が勧める生の内実と、エピクロス派の生の思想の後代における受容を、2008 年度は主にストア派が勧める生の内実と、ストア派の生の思想の後代における受容を研究し、2009 年度は主に両派の生の思想の後代における受容の研究の続き、および、両派が勧める生を現代人に対して提示する作業を行なった。

研究図書を選定・購入した。

2009 年 1 月、秋田大学近藤智彦氏と東北大学にて研究集会を行なった。

2009 年 3 月、エクセター大学クリストファー・ギル氏からヘレニズムの倫理学についての専門的知識の提供を受けた。

2009 年 6 月ブリュッセル自由大学スィルヴァン・デルコミネット氏とシンポジウム「ギリシャ哲学における善と幸福」を開催した。

４．研究成果

「研究の目的」に記した（A）については３つの主要な成果がある。

①エピクロス派にかんするひとつの発見（ないし誤解の自覚）が本研究にとってとり

わけ重要であった。研究期間の初めのうち研究代表者は、エピクロス哲学――とくにこれが勧める生――の理解について、カール・マルクスの学位論文「デモクリトス自然哲学とエピクロス自然哲学の差異」(1841 年提出)や、マーサ・ヌスバウムの『欲望の治療』(1994 年)の影響下にあった(研究代表者はマルクスの学位論文におけるエピクロス派解釈について「学位論文におけるマルクスの方法の一側面」と題する論文を 2008 年に発表した)。マルクスやヌスバウムによれば、エピクロス派の唯一至上の課題は魂の平静を得ることであり、したがってエピクロスはわれわれに、“自然学上の問題について何を信じるべきか”はひとえに、“そう信じることが魂の平静の実現にどれだけ寄与するか”を規準にして決めよと教えている。つまり、真理の追求が問題になるのは、(a) 行為の選択のさいにじぶんのある信念に依拠する場合、その信念が誤っていると快をとりにがしたり苦にみまわれたりするからか、あるいは、(b) 真だと信じていたことが偽だと判明したあかつきにはそれにより心の平静がかき乱されるからかのいずれかにすぎない。すると、それらの望ましくない事態をのがれつづける見込みがありさえするなら、じぶんが信じる内容の真偽じたいはどうでもよいことになる。

エピクロス哲学のこうしたマルクス、ヌスバウム流の理解を前提として研究代表者は、「死はおそろしくない」とするエピクロスおよびエピクロス派の議論の解釈を行ない、2008 年 8 月の韓国、Daegu の Donghwasa Temple にての International Colloquium of Ancient Philosophy and Greco-Roman Studies で ‘The Epicurean Attitude to Death’ と題する発表を行ない、同題名の論文を同コロキウムの論文集に発表し、ついで同年 10 月の多摩哲学会大会で「死に対するエピクロス的態度」と題する研究発表を行なった。

だが、とりわけ本研究の研究意見交換の機会に、このマルクス、ヌスバウム流エピクロス派解釈の問題点が指摘された。すなわち、2009 年 1 月に東北大学で開催された、秋田大学 近藤 智彦 氏との研究集会、そして同年 3 月に慶應義塾大学で開催された、エクセタ大学 クリストファ・ギル氏との研究集会である。とくにギル氏は、エピクロス派において自然学上の知が幸福(魂の平静)の不可欠の条件である点を説得的に論じられた。デイヴィド・セドリの ‘The Inferential foundations of Epicurean ethics’ (G. Giannantoni, M. Gigante (ed.), *Epicureismo Greco e Romano,* Naples, 1996) における、“最高善についてのエピクロス派の倫理学上の議論の最初の数段階が、原子と空虚についての自然学上の議論の最初の数段階と並行関係にある”という主張はまさに問題の点にかかわるとのギル氏の指摘に啓発された。

こうして、エピクロス派も、「幸福の実現のために自然学上の知(たんにじぶんに好都合な思いではなく)が必要である」という主張をストア派と共有していることになる。これは、一見するとまるで異質なように思えるエピクロス派・ストア派の哲学が、それらが勧める生という点についても、じつは大きな親近性をもつことを意味する。ほかの点もさることながらこの点においても両派は古代のエウダイモニア論の共通の枠組内にあると言ってよかろう。

こうして得られた新知見に基づき、むろんそれまでの研究成果を再編成的に活用して、2009 年 4 月、台湾、淡水の真理大学にて ‘Epicurus on Life and Death’ と題する講演を行なった。

(2009 年 3 月のギル氏との意見交換に際してはまた、エピクロス派は正義、節制、勇気、敬虔といった伝統的諸徳の再解釈を行なっているといえるのではないかとの興味深い示唆を受け、それ以降の研究のモチーフのひとつとなった。その視点は 2009 年 4 月の講演にも活かされている。)

② エピクロス派、ストア派が勧める生の内実を浮き彫りにするのに、それぞれの神観に着目するのが有効であることが明らかになった。

エピクロス派の神理解については、「エピクロスにとって神々は宇宙と宇宙のあいだに、繊細な物体として実在し、そこから発出する影像をつうじてわれわれは神々を認識する」という解釈(「実在論的解釈」)と、「エピクロスによれば神々とは、人間がじぶんにとっての理想のありかたを外界に投射した産物である」という解釈(「観念論的解釈」)の論争がある。研究代表者はパピルス学の訓練を受けておらず、関連資料であるヘラクラネイム文書の校訂(穴をどう埋めるかについての推測が作業の大きな部分を占める)にかんしては先行研究者の仕事を信頼して受容しこれを出発点にせざるをえない。だがデイヴィド・セドリ氏による観念論的解釈は、第一に、説得的な議論によって支持されていると思われ、第二に、哲学的にじつに興味深い神観をエピクロスに帰するものだと考えられる。

セドリ氏がその解釈を最初に提示したのは、上の「研究開始当初の背景」の冒頭で言及した Long & Sedley においてであるが、 ’Epicurus’ theological innatism’ in J. Fish and K. Sanders (eds.), *Epicurus and the Epicurean Tradition* (Cambridge, forthcoming) で氏は、エピクロスによればわれわれ人間には、じぶんの理想を視覚化しよ

うとする傾向が生得的に備わっていると主張する。研究代表者はプラトンの『ピレボス』篇の「虚偽の快楽」の第一議論（37-40）においても、じぶんの理想の視覚化（そしていわば反芻）への傾向という論点が示されていると考える。これは生の理想をいだきつつ生きるとはいかなることかをおさえるうえで重要な論点であり、かつ、古典期のプラトンとヘレニズム期のエピクロスをつなぐ興味深い論点のひとつであると考えられる。研究代表者はさしあたりは主として『ピレボス』篇の議論の解釈という形で、しかしエピクロス派との関連を念頭におきながら、この事象について 2009 年 6 月、ギリシャのデルフィで開催されたチャールズ・カーン記念論文集シンポジウムにて ‘False Pleasures in the *Philebus*’ と題する発表を行ない、そこでサラ・ブロウディ、ドロテア・フレーデ、クリストファ・ロウらから受けた批判・コメント・質問をふまえ大幅に改訂して、2010 年 3 月、アイルランド、ダブリンのトリニティ・コレジのプラトン的伝統研究センターにて、また若干の改訂を加え、英国、ケンブリジ大学古典学科の B クラブにて ‘False Pleasures’ と題する発表を行なった。（この論文は Parmenides Publishing のチャールズ・カーン記念論文集に収録される予定である。

ストア派の宗教観については、とくに運命論との関連で近藤智彦氏より多くの示唆をうけた。（アンティパトロスの「目的」規定と、アリストテレスの自己目的的行為と制作との区別との関連についての指摘も啓発的であった。）

③　エピクロス派、ストア派の倫理学は「自己中心的」であると言われ、そのゆえに、他人にたいする尊重、愛、関心を欠くいびつな倫理学として不信感をもたれてきた。だが両派とも他人を大切にすることを説く。

問題は、それらの学派によればなぜ他人を大切にしなければならないのか、である。これを論じる二通りのやりかたがあるように思われた。すなわちジュリア・アナス流とクリストファ・ギル流である。アナスはエピクロス派、ストア派（それらに限らず、アリストテレスもふくむ古代倫理学全般）は自己中心的な枠組をもっているが、これを前提としたうえで、他人を大切にすることの意味に説きおよんでいると論じる。これにたいしてギルは、エピクロス派の友情、ストア派の共同性はかれらの倫理学の基本枠組に属する還元不能な原理的なものであると論じ、それらヘレニズムの倫理学が自己中心的枠組をもつとの想定じたいを批判する。じつに微妙な問題だが、アナスとギルのそれぞれが真実の一面を衝いているように思われる。いずれにせよ、他人をまさにひとつの人格であるかゆえに、あるいは他者であるがゆえに尊重すべしとの考えはエピクロス派、ストア派と無縁であろう。しかしそのことは、これらヘレニズムの二学派の倫理学の致命的欠陥ではないと考えられる。

(B)　次項「５．主な発表論文等」に記された論文、学会発表、図書にて、エピクロス派、ストア派の勧める生を提示し、およびこれと関連する主題について論じた。

主としてエピクロス派、ストア派（主としてエピクロス派）の勧める生についての単著を執筆中である。

エピクロス派、ストア派の勧める生は現代人に対して次のように提示される。自己の生全体の理性的設計が勧められる。だれしも、進学、就職、キャリア・アップ、結婚、育児、資産運用等、人生行路のかなめとなる諸点をめぐって、人生設計をおこなっていよう。だがこうした点についての考慮はあるいみで場当たり的なものに終始してしまうかもしれない。エピクロス派、ストア派は、“そもそもなにかがわれわれによって価値を有するとはいかなることか”という原理的次元にさかのぼってよき人生を構想することを勧める。人生におけるさまざまな活動、努力、こだわりが一貫性をもつよううながすのである。自己の生活（ひいては、じぶんの暮らす社会）における非合理な要素を冷静かつ真剣に除去するよう勧める。こうした視点は、たとえばあるとき職や大切なひとを失ってしまったとき、なおも人生を歩みつづける力をもたらすであろう。

エピクロス派、ストア派とも、魂の平静を理想とする。この理想じたい多くの現代人にアピールすると考えられるが、両学派の魅力は、魂が平静である境地の積極的意味を説いていることにある。エピクロス派では、混乱なき魂の状態は快、それも最高度の快たる「静的」快であるとして、快楽主義的価値論のなかに位置づけられる。ストア派では、有徳なひとすなわち賢者の堅固なるありようのしるしとして「情念」なき境地がいわれ、そこには明朗快活さがあるとされる。

よく生きるためにエピクロス派がとくに勧めるのは、死への恐れ、神々への恐れを除去することである（死はおそろしくない、神々はおそろしくないと理性的に理解することをつうじて）。エピクロスが死はおそろしくないというのは、“ひとが死ねばそのひとの自己は完全に消失するが、自己が完全に消失することはおそろしいことではない”という理由による。死についてのこの理解は、あくまでひとつの可能な考え方にすぎないが、多くの現代人のうちに深く根をおろしている科学的世界像とよく調和し、しかも、哲学的な強みと、死生観としてのある魅力をもっていると考えられる。

神々にたいする恐れは、少なからぬ現代人にとっては古代人にとってほどの深刻さをもたないかもしれないが、無宗教を自称するひとの心を折にふれて襲いもする。また、神々への恐れをとりのぞくためのエピクロス派的議論の一部は、「神々」を「世間」におきかえれば現代のわれわれにとってアクチュアリティをもつと考えられる。

ストア派の勧める生のきわだった特徴は、自己を大いなる世界（あるいは宇宙）全体の一部として観じつつ生きることである（オイケイオーシスの発達した段階）。これは一種の全体主義だが、すくなくともファシズムやスターリニズムのような政治的全体主義ではない。世界（宇宙）全体は人間界をふくみながらもそれよりはるかに大きいので。

こんにち、刑罰の是非や正当化、またテロリズムへの対処の文脈で、報復の連鎖をいかに断ちうるかが論議されているが、こうしたストア派の視点は、＜報復をしない倫理＞にむかうひとつの通路を示しているように思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 荻原 理「プラトン 見つからなければ不正を犯していいか――生の質を決める魂のあり方を不正行為は損なってしまう――」、『人間会議』、査読無、19 号、2008 年、78-83 頁。
② 荻原 理「学位論文におけるマルクスの方法の一側面」、『文化』、査読無、71 巻、2008 年、1-24 頁。
③ 荻原 理「われわれがしていることにめまいをおぼえてはならない――ジョン・マクダウェル「徳と理性」解説――」、『思想』、査読無、1011 号、2008 年、80-96 頁。

〔学会発表〕（計１４件）
① Satoshi Ogihara, ‘False Pleasures’, エクセタ大学古典学科 Graduate Seminar、エクセタ、英国 2010 年 3 月 23 日
② Satoshi Ogihara, ‘False Pleasures’, ケンブリジ大学古典学科 Bクラブ、ケンブリジ、英国 2010 年 3 月 8 日
③ Satoshi Ogihara, ‘The Choice of Life in the Myth of Er in Plato’s *Republic*’, トリニティ・コレジ プラトン的伝統研究センター、ダブリン、アイルランド 2010 年 2 月 12 日
④ Satoshi Ogihara, ‘The Choice of Life in the Myth of Er’, 科研「古代ギリシア正義論の欧文総合研究―プラトン『国家』とその伝統」（研究代表：納富 信留）研究集会（Christopher Gill 教授を囲んで）、強羅静雲荘、箱根 2009 年 7 月 5 日
⑤ Satoshi Ogihara, ‘False Pleasures in the *Philebus*’, Presocratics and Plato: Festschrift Symposium in Honor of Charles H. Kahn, デルフィ・センター、デルフィ、ギリシャ 2009 年 6 月 5 日
⑥ Satoshi Ogihara, ‘The Brothers’ Challenge to Socrates at the Beginning of Book 2 of the *Republic*’, Reason and Virtue: Plato, Epicurus & McDowell, 中国文化大学、台北、台湾 2009 年 4 月 27 日
⑦ Satoshi Ogihara, ‘John McDowell on Ethics’, Reason and Virtue: Plato, Epicurus & McDowell, 台北大学、台北、台湾 2009 年 4 月 24 日
⑧ Satoshi Ogihara, ‘Epicurus on Life and Death’, Reason and Virtue: Plato, Epicurus & McDowell, 真理大学、淡水、台湾 2009 年 4 月 23 日
⑨ Satoshi Ogihara, ‘Greek Civilization’, Reason and Virtue: Plato, Epicurus & McDowell, 真理大学、淡水、台湾 2009 年 4 月 23 日
⑩ Satoshi Ogihara, ‘Some Remarks on the Accounts of the Tripartite Psychology in Plato’s *Republic*’, 科研「古代ギリシア正義論の欧文総合研究―プラトン『国家』とその伝統」研究集会（Christopher Gill 教授を囲んで）、ホテルふじ、山梨県石和 2009 年 3 月 21 日
⑪ 荻原 理「死に対するエピクロス的態度」、多摩哲学会 第 6 回大会、中央大学駿河台記念館、東京都千代田区、2008 年 12 月 7 日
⑫ Satoshi Ogihara, ‘The Epicurean Attitude to Death’, International Colloquium of Ancient Philosophy and Greco-Roman Studies, Summer 2008, Donghwasa Temple, Daegu, 韓国 2008 年 8 月 6 日
⑬ Satoshi Ogihara, ‘The Analogy between legislation and medicine in Plato’s *Laws*’, 科研「ギリシャ政治哲学の総括的研究」（研究代表：加藤 信朗）2008 年度総会（Malcolm Schofield 教授を囲んで）、首都大学東京、東京都八王子、2008 年 9 月 7 日
⑭ Satoshi Ogihara, ‘The Contrast between Soul and Body in the Analysis of Pleasure in the *Philebus*’, the Eighth Symposium of International Plato Society, トリニティ・コレジ、ダブリン、アイルランド 2007 年 7 月 24 日

〔図書〕（計２件）
① 共著, John Dillon, Dorothea Frede, Hugh H. Benson, Francisco Bravo, Mary

Louise Gill, Christopher Gill, Charles H. Kahn, Michel Nancy, Noburu Notomi, Richard Patterson, Naomi Roshotko, Satoshi Ogihara ほか全 52 名, John Dillon, Luc Brisson 編, *Plato's* Philebus: *Selected Papers from the Eighth Symposium Platonicum,* Academia Verlag, 2010 年、全 430 頁、215-220 頁.
②共著, Nicolas D. Smith, Sung-Hoon Kang, Satoshi Ogihara, Edward Halper, Hun-Sang Chun, Arnaud Macé, *International Colloquium of Ancient Philosophy and Greco-Roman Studies,* The Korean Society of Greco-Roman Studies, 2008 年, 全 97 頁、47-58 頁.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
①シンポジウム「ギリシア哲学における善と幸福」組織、司会、東北大学、2009 年 6 月 25 日（提題：スィルヴァン・デルコミネット「プラトンの善論（アガトロジー）」）

６．研究組織
(1)研究代表者
荻原　理（OGIHARA SATOSHI）
東北大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号　００３４４６３０

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
金山　弥平（YASUHIRA KANAYAMA）
名古屋大学・文学研究科・教授
研究者番号　００１９２５４２
神崎　繁（SHIGERU KANZAKI）
専修大学・文学部・教授
研究者番号　２０１５３２０５
近藤　智彦（TOMOHIKO KONDO）
秋田大学・教育文化学部・講師
研究者番号　３０４２２３８０